

平成21年4月29日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520294
 研究課題名（和文） 東北日本・日本海沿岸地域を対象とする
 角筆文献データベース作成に向けての基礎的研究
 研究課題名（英文） The Fundamental Study of Kakuhitsu Documents Database Making for
 Northeastern Japan / Sea of Japan Coastal Areas
 研究代表者 鈴木 恵（SUZUKI Megumu）
 新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
 研究者番号：60163010

研究成果の概要：調査した新潟県・山形県・秋田県・青森県、すべての県から角筆文献が発見され、東北日本・日本海沿岸地域においてはほぼその全域で角筆という文房具が使用され、角筆文字が書き入れられていたことが判明した。佐渡からは、竹製の角筆が発見された。今後、東日本全体を調査する必要がある。

以下、旧藩校あるいは関連資料の角筆使用状況について、分析・検討した結果（概要）を記す。

(1) 旧長岡藩・崇徳館(新潟県)、旧庄内藩・致道館(山形県)、旧津軽藩・稽古館(青森県)の調査においては、すべてで角筆文献が発見されたが、調査文献中の角筆発見率はそれぞれ 6.9%、2.0%、8.7%であって、致道館所蔵文献の発見率が最も低かった。これは、致道館の文献管理の厳重さと、現在の蔵書に他から紛れ込んだものがなく、当時のままの状態が保たれていることが大きな要因と考えられる。

(2) 旧長岡藩・崇徳館の調査では、全体の角筆発見率が 6.9%であるのに対して、経之部 7.8%、史之部 17.4%であるように、文献の種類によって角筆使用に相違が看取された。このことは、藩校における学問上の重点の置き方に結びつく可能性がある。

(3) 旧津軽藩・稽古館調査では、「稽古館」の蔵書印を有する文献から角筆の発見はなかった。これは、上記致道館同様の文献管理の厳重さによるものと推測される。ただし、「弘前藩学校」「軍事局」等の蔵書印を有する文献からは角筆が見つかっており、幕末から明治初期にかけて文献の取り扱い方に変化が見られるようである。また、「奥文庫」の蔵書印を有する文献から角筆が発見されていることから、藩主もしくはそれに関係する人物が角筆を使用していたことが確認できた。

(4) 旧庄内藩士・黒崎家および辺見家、旧秋田藩士・蓮沼家および長瀬家の文献調査から、藩士の家においては、藩校よりも格段に高い確率で角筆が使用されていることが判明した。管理が厳重な藩校の文献に比し、個人所有の文献に対する気軽さによるものと考えられる。また、家によって角筆の使用に差異が見られることもわかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,600,000	0	1,600,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,500,000	330,000	3,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本語学

キーワード：角筆文献、角筆スコープ、デジタル撮影、藩校、庄内藩、秋田藩、津軽藩

1. 研究開始当初の背景

筆者は、平成9年度から11年度までの3ヶ年の間、小林芳規氏を研究代表者とする「西日本各地を対象とする角筆文献発掘調査研究と角筆文字解読用機器の開発研究」(科学研究費・基盤研究B-1)に研究分担者として参加する機会を得、新潟大学に在職していること、これまで新潟大学附属図書館佐野文庫の角筆文献調査を継続して行っていることなどを尊重され、唯一東日本である新潟県下の調査研究を担当した。

その結果、新潟県立佐渡高等学校八田文庫、佐渡郡真野町(現佐渡市)・山本半右衛門家荏川文庫、長岡市立阪之上小学校ふるさと教室所蔵文献を始めとして、県内各所において発掘調査を行い、多数の角筆文献を発見することができた。

しかして、かつて越後においても文房具として角筆が用いられ、角筆文字が記されていたことが確認できたわけであるが、これまでの角筆研究が、あまりにも西日本に偏重したものであったことを踏まえ、東北日本、とりわけ新潟県に続く日本海沿岸地域での角筆文献発掘調査を早急に実施すべきとの感を深くした。

2. 研究の目的

本研究は、将来的には東日本全域の調査を見ずえながら、まず新潟県下の調査を綿密に行い、県内全域の角筆文献の実態を分析・検討した上で、日本海沿岸を北上しつつ、山形県・秋田県・青森県下の角筆文献発掘調査を実施して、東北日本・日本海沿岸地域の角筆文献データベースを作成し、あわせて同地域における言語と文化を、角筆文献を通して通時的に解明することを目的としている。

3. 研究の方法

(1) 従来の角筆文献調査は全くのアナログ式であって、懐中電灯を片手に、その光を文献の紙面に斜めに当て、その微妙な凹みの影の中から有意

の角筆を見つけ出し、これを調査用紙にひとつひとつを手作業で抜き書きするという、途方もない時間と労力を要するものであった。通常、角筆は緑色の色鉛筆をもって忠実に模写し、墨書・朱書などの書き入れがあればこれも書き写すのであるが、書き入れ同士が重なる場合の模写には多大な困難が伴い、加えて加点の前後関係を判断し、これを指し示す注記が必要であった。また、手作業で抜き書きするために、どうしても調査者の筆癖が出てしまうという、回避することができない致命的とも言える難点があった。

(2) これを大幅に改善する方法として、角筆をより見やすくするための光源の開発と、デジタルカメラの活用が考えられた。ただでさえ撮影しにくい角筆文字を写す場合は、現像してみなくては映っていたのかどうかを確認できない、従来のフィルム式のカメラでは、まったく用をなさないのである。幸い、懐中電灯に替わる新たな光源の開発に関しては、オプトキューブ社(神戸市)によって携帯用「角筆スコープ」が開発され、またデジタルカメラについても、近年になって解像度が高く、より大容量の記憶媒体を使用できる機種が揃ってきている。本研究においては、これらをフルに活用することにした。

(3) また、従来の一般的な角筆文献発掘調査が、角筆の所在を確認することに主たる目的があったのに対し、本研究においては「悉皆調査」を原則としている点に大きな違いがある。

「悉皆調査」は、当該文庫等に蔵せられるすべての書籍のひとつひとつを、文字通り虱潰しに調査し、その各々について、一定の書式に従って細密な調書を作成するものである。その目的のひとつに、微少な角筆を細大漏らさず発見することがあることは言うまでもないが、最大の目的は、いかなる質の、どのくらいの分量の文献群の中で、どのような分野・ジャンルの文献に、どれほどの、そしていかなる種類の角筆が発見されるかという

問題を分析・検討し、文献全体の中での角筆文献の位置づけを解明することにある。

ちなみに、筆者は「悉皆調査」のひとつとして新潟大学附属図書館佐野文庫調査を行ったが、これは延べ194日の日数と、1,998名の人員を動員して成し遂げられた、膨大な時間と労力とを要するものであった。

(4) 前項(2)においては、角筆文献調査の正確さと、一層の効率化を図るために、大幅に撮影・編集用機器を導入したことを述べたが、(3)に記したように、角筆文献調査には、まずは角筆による書き入れを発見し、これを正確に読解する優秀な調査者が不可欠である。この点、当研究室の学生は、各丁・頁の一字一句に目を凝らし、紙面に斜めに光を当てつつ、その凹みにできた影の中から有意の角筆を、注意深く丹念に根気よく拾い出すという、気の遠くなるような作業に永年従事し、その力を十分に発揮できるように訓練されている。角筆による書き入れを発見する「目」の養成、人材の確保はこの種の研究の前提条件である。

4. 研究成果

(1) 初年度の平成17年度は、新潟県下各地の調査を実施した。佐渡市(旧佐和田町)・県立佐渡高校八田文庫、佐渡市(旧真野町)・山本半右衛門家荏川文庫、三条市(旧下田村)・諸橋徹次記念館、加茂市・法華宗本量寺、新潟市・県立文書館である。県立文書館では、新潟市(旧亀田町)・渡辺家文書、新潟市(旧西川町)・笠井家文書、魚沼市(旧広神村)・桜井家文書を調査対象とした。

また、同じく佐渡・山本半右衛門家荏川文庫から、筆記用具としての角筆(ただし江戸時代には字指・字突と称するらしい)2本が見つかった。新潟県下では初めての発見である。いずれも竹製で、このうちの1本は先を尖らせてあり、筆記に用いたものと察せられる。時代的には、当家から角筆文献が多く見つかる8世雪亭(山本恒)の時代のものかと目され、雪亭その人が使用した用具の如くに推測される。もう1本は漆を施してあり珍重されたものようであるが、先端に向かって少しずつ細くなる四角柱状で、最先端もまた四角である(尖っていない)。そのため、後者は正に字指・字突の用のみに供せられたものであって、筆記に用いられたとは考えにくい。

(2) 第2年次の平成18年度は、山形県内の角筆

文献調査を実施すべく、鶴岡市立図書館・郷土資料室所蔵の旧庄内藩校・致道館蔵書の文献調査を実施した。また、引き続き新潟県立文書館(新潟市)、諸橋徹次記念館(三条市)の調査を行った。県立文書館では、魚沼市(旧広神村)桜井家文書、新発田市(旧豊浦町)渡辺家文書を調査対象とした。なお、1996年11月1日より始まった諸橋記念館調査は、ちょうど10年目の2006年10月で無事すべての文献の調査が完了した。

旧庄内藩校・致道館にはもともと約11000冊の蔵書があったようで、現在でも293文献の約6600冊が遺存している。現存本のほとんどは民間に流れ出ることなく、旧藩時代そのままに保存されていると推測されるため、江戸時代の藩校における角筆使用が如何なる状態であったかを知る、貴重な文献である。2006年11月から2007年2月にかけて3度の調査を行った。

この年度においては、経之部から史・制度・地理・子・兵書を経て集之部の『唐後詩』まで104文献2152冊、寄託部3文献174冊を加えて、全部で107文献2326冊の調査を終了したが、これは文献数で全体の36.5%、冊数で35.2%に当たる。このうち角筆は6文献で発見されたが、これは調査文献の5.6%である。子之部1点以外は、すべて経之部(『四書大全』が2資料)で発見されたということは、やはり四書五経の類が最も多いことになる。

ちなみに、旧長岡藩校・崇徳館蔵書(長岡市立阪之上小学校所蔵)における発見率は6.9%とやや高く、また経之部(7.8%)よりも史之部(17.4%)の方が高かったので、藩校によって学問上の重点の置き方が異なっていたことが推測された。

(3) 第3年次の平成19年度は、山形県内の角筆文献調査を継続したほか、新たに秋田県内の調査を実施した。また、新潟県立文書館において、新発田市の渡辺家文書調査を行った。

山形県調査では、前年度に引き続いて鶴岡市立図書館・郷土資料室所蔵の旧庄内藩校・致道館蔵書の文献調査を実施し、これを完了した。全部で296文献、6909冊の悉皆調査を実施した結果、6文献(2%)から角筆を発見したが、これは先述の旧長岡藩校・崇徳館蔵書における発見率6.9%に比して、極めて小さな数値であった。しかし、旧庄内藩士・黒崎家蔵書の42文献からは3文献(7.1%)、辺見家蔵書の(調査終了分)13文献からは3文献(

23%)が発見できたことを勘案すると、庄内藩で筆記用具・角筆が日常的に使用されていたことは間違いなく、その中で藩校・致道館の蔵書が極めて厳重に管理され、大切に使用されており、それがために藩校資料に角筆文献が少ないのではないかと推測された。

秋田県調査では、秋田市立中央図書館明德館所蔵の、旧秋田藩士蓮沼家文書と長瀬家文書の文献調査を実施した。藩校・明德館の資料は、残念ながら散逸してしまったようである。蓮沼家文書・長瀬家文書調査は悉皆調査ではなく、経験的に角筆が発見されやすい資料を選定して行うという方法を採用した。蓮沼家文書は400文献中102文献を調査したが、角筆は全く発見できなかった。これに対して、長瀬家文書においては学芸分野の85文献から5文献、これに平成11年の西村浩子氏による調査で確認されていた3文献を加えると、全部で8文献(9.4%)から角筆が発見されるという、極めて対蹠的な結果となった。同じ藩士であっても、家によって、文献や筆記用具の取り扱い方にかなりの相違が見られることがわかった。ちなみに、長瀬家は一般藩士、蓮沼家は上級藩士であったようである。

(4) 第4年次の平成20年度(最終年度)は、青森県内の角筆文献調査を実施したほか、新潟県立文書館において、新発田市の渡辺家文書ならびに新潟市(旧白根市)の谷川家文書の調査を行った。青森県内の調査は、旧津軽藩関係の文献の大部分を所蔵する東奥義塾高校を中心とし、あわせて関係文献を所蔵する弘前市立弘前図書館の調査を行った。

このうち東奥義塾高校は948文献を蔵し、「奥文庫」「稽古館蔵」「弘前学問所」「弘道館印」「弘前藩学校」「軍事局印」などの蔵書印から推して、藩主から藩士まで、旧津軽藩関係者の様々なレベルでの角筆使用の実態、その全体像を明らかにする上で、恰好の資料を提供してくれるものと考えられる。9月と10月の2度、合計9日間で149文献の調査を実施し、そのうち13文献(8.7%)から角筆による書き入れを発見することができた。これは旧庄内藩校・致道館蔵書における発見率(2.0%)や、旧長岡藩校・崇徳館蔵書における発見率(6.9%)に比して、決して小さい数字ではない。

現時点までは、「稽古館」の蔵書印を有する文献からの角筆の発見はなく、幕末から明

治初期にかけてと目される「弘前藩学校」「軍事局」「(旧)東奥義塾」の蔵書印を有する文献、あるいは藩主・津軽家の使用した「奥文庫」の蔵書印を有する文献から発見されたことは大きな特徴とされる。特に、藩主・津軽家の某人が書き入れたと推測される角筆を発見できたことは、筆者の従来の調査にはなかったことであった。今後、全容を解明するための悉皆調査が望まれるところである。

なお、9月に2日間実施した弘前図書館調査では、全34文献中6文献(17.6%)の如く、かなりの高率で角筆の書入を発見することができた。こちらは藩士の蔵書が多く、今後の調査が急務である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①鈴木恵、小学校国語、新潟市教育委員会と教育人間科学部の連携による「12年経験者研修」プログラム・教材開発研究―第2年次研究報告―、14-18、平成18年(2006)、査読無

②鈴木恵、佐藤佐敏教諭の授業(中2)を手がかりに、「小・中学校9か年を見通した学び合いにおける話すこと・聞くことの能力育成」(科学研究費、基盤研究(C)研究成果報告書)、139-151、155-178、平成19年(2007)、査読無

[学会発表] (計 2 件)

①鈴木恵、現職教員に特化した「一年制」大学院、日本教育大学協会研究集会、平成19年10月20日、福井大学

②鈴木恵、『ほんのこべや』の舞台裏―続貂一、大学生協全国教職員セミナー、平成20年9月13日、朱鷺メッセ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 恵 (SUZUKI Megumu)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：60163010

(2) 研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし